

より良い英語教育に向けての取り組み

—英語教諭との連携と保護者の意識調査—

文京女子大学文京幼稚園*

橋本 容子 益田 薫子 奥村 幸子 西村 有美 山中 理恵
瀬戸 規子 戸部 礼子 有賀絵美子 梶井 洋子 小島加奈恵
安野麻奈加 井上 京子 宮城 紀子
アレン玉井光江 上野めぐみ

Abstract

This paper reports on some attempts to develop a better English education program at Bunkyo Kindergarten. First, the communication system between English teachers and kindergarten teachers is introduced. We developed original notebooks to maintain good communication. Then, survey research is discussed. The parents of 4-year-olds and 5-year-olds were asked to answer questionnaires relating to English classes held at the kindergarten. They generally showed a positive attitude towards English lessons.

Key Words : Kindergarten English Education, Questionnaire research, Cooperation between English and kindergarten teachers

Towards a Better Kindergarten English Education Program

* Youko Hashimoto and Others

Correspondence Address : Department of Human Studies, Bunkyo Women's University,
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 19, 1999.

Published December 20, 1999.

はじめに

本園では、早くから保育の中に英語を取り入れてきたが、幼稚園における英語教育の実践は、保育に関わる方々や地域の人々にも関心を持たれている。

前回（平成9年度）の研究では、外国語教育の意義と実情や、本園における英語教育の変遷と英語教育の方法と実践を述べた。今回は「より良い英語教育に向けての取り組み」について研究を行うこととする。

1章では英語教諭の立場から意見を伺う。2章では、英語教育をより充実するための工夫について実践例を基にして発表したい。子どもの興味をひきつけながら、楽しく英語に親しむことができる授業内容にするためには、様々な方法があり、英語教諭との連携が多く必要となってくるのではないだろうか。

3章では、「本園の英語教育に対する保護者の意識」について研究を行う。本園では初めての試みとして英語教育に関するアンケートを作成し、年中・年長組の保護者を対象として調査を行った。第1回目は主に、英語教育に対する考えを知ることを目的とした。第2回目は、年度末に調査を行い、子どもが英語教育を受けた感想を中心としたものであった。特に年長組の子どもは、年中組の5月から年長組の3月まで約2年間授業を受けているため、その成果を保護者がどのように受け止めているのか、大変興味深い点である。

以上のような課題を実践探求として、保育者全員で研究に取り組むこととした。

（橋本 容子）

1. 文京幼稚園における英語教育

言語を学習するには、小さな子どもが経験するように自然にその言語に接することが大事であるとよく言われる。しかしながら目的言語が話されている第二言語環境（second language context）とは違いほとんど目的言語に接する機会に恵まれない外国語環境（foreign language context）において、自然な言語習得を望むのは非常に難しいことである。外国語学習における「自然な学習」とはどのようなことを意味するのであろうか。実際のところ外国語環境における幼児の言語学習に関しての研究は驚くほど少ない。果たしてどのような授業形態、カリキュラム、教材が「自然な学習」に最適なのであろうか。

文京幼稚園で英語教諭として30人ちかくの幼児に週1回20分の授業をする機会に恵まれ8年目を迎えた。この間、何を、どのように教えるべきなのか暗中模索の日々が続いているが、振り返ると大きな変化を2つ経験したように思われる。一つは本論文に書かれている保育者との

連携の向上であり、もう一つは基本的な言語教育に対するアプローチの変化である。

初めのうち言語材料を中心に授業計画を立てるいわゆる language-based approach に比重が置かれていた。が、先ほど述べた「自然な学習」を促すため、ここ数年 activity-based approach をより積極的に取り入れるように努力している。このアプローチは簡単に言えば、子どもたちに practical task (実際にしなければいけない作業) を与え、彼らがそれをやり遂げていく過程で (教師が導入したい) 言語材料を自然に身につけるように授業を構成していく方法である。この方法は柔軟性に富み、子どもたちどうしの相互関係、信頼関係を増す等の利点があるが、適当な言語材料を含む practical task を作るのが想像以上に難しく、また時間を費やす仕事である。この practical task は、子どもの心と体の成長に適したものでなければ意味がなく、そのためにも子どもたちの生活全体を把握し、彼らの認知発達について理解することが必要である。このアプローチで授業を進めるには、毎日幼児と深く関わっている保育者からのフィードバックが非常に大切な要素になってくる。

以前から担任の保育者の考え方が英語の授業の成功に深く関わっていると感じていたが、先ほど英語教育の実験校に指定されている公立小学校での授業を見学し、その感をさらに深めた。私が見学したのは AET (Assistant Language Teacher 外国語指導助手) が行った 4 年生と 5 年生のクラスであった。1 学年という年の差があるにもかかわらず、4 年生のクラスのほうが授業がスムーズに進み、また AET の先生、担任の先生、児童がそれぞれ非常に楽しそうに交わっていた。この違いの大きな要因は担任教師の英語に対する態度にあったように思われる。

文京幼稚園においては全ての保育者が英語の研修を受けるなど、「子どもにとってよりよい英語教育」を求め熱心に取り組まれている。この園で行われている保育者と英語教諭との連携を深めるための小さな試みは、これから多くの公立小学校で取り組まれる英語教育に多くの示唆を与えるであろう。

(アレン玉井光江)

より「自然な英語学習」に向けて

文京幼稚園では年中児、年長児に当たる子どもたちに週 1 回 15 分、20 分の時間を英語と触れ合う機会として設けている。また、97 年度より、年中児におけるレッスンの開始時期を 10 月から 5 月に繰り上げている。果たしてその効果がどのように現れてくるのか、また、子どもたちの年齢、月齢に適したカリキュラムをどの視点から組み立てていくのが非常に難しいところである。年中、年長の 2 年間を見据えた上での 1 年目のカリキュラム作成については手応えを確かめながら進めている感がある。より「自然な学習」とは一体どのようなものなのか、子どもたちの興味を引き付けながらより合理的に英語に触れられる場とは一体どうあるべきなのか、等、常に意識下に置かなくてはならない。幼稚園内行事との連動、特に時間の制約の中でどの行事をどの程度組み込んで、その中で焦点を当てるべきか等、全ての条件を当てはめて定着を図るポイントを絞り込むためには、やはり子どもたちの日常 (心と体の成長) を知る保育

者との連携の重要性を感じている。例として掲げるとするならば、導入語彙、ゲーム、うた等(子どもたちにとっての日常的、非日常的事物をうまく取り入れることで効果を上げることができるとするならば)その導入の順序や approach を含めた形態は重要であるに違いない。季節や子どもたちを取り巻く環境を念頭に彼らの認知発達に合わせた言語材料でレッスンを考え、さらに、年長のカリキュラムの土台作りをするためには年長の授業の年間を通じての observation の必要性を痛感している。年中・年長組を受け持つ保育者と英語教師間の密なる連携だけではなく、2年にわたってのカリキュラムとその導入法について英語教師間に常に話し合いが持たれなければならぬ。

さて、レッスン開始時期が5月になったことで具体的にどんな変化がもたらされつつあるか主観ではあるが記すことにする。まず、明確な変化としてはカリキュラムに多少ながら余裕が持て、夏休み以前、以降の様子を把握しながら進度を図ることが可能となる。はっきりとした根拠を提示することは現在のところ難しいのだが夏休み以前に導入することにより英語に対しての‘意識’の存在が見えてくるように思える。勿論、個人差があり、motivation を持つというには年齢が低すぎるとの指摘があるかもしれないが夏休み以降に子どもたちから「英語のTVたくさん見たよ。」「英語のご本見たよ、読んでもらったよ。」等との報告を受けることさえある。夏休みの間の子どもたちなりの英語に対する意識は継続の形ではないにしろ存在していると考えられないだろうか。新しい言葉への興味と期待、不安など各々の内部で生まれくる子どもたちの感情の整理を夏休みという interval を持つことでその反応と効果を主観的にも客観的にも観察する機会を得られ、その反応を分析しつつアプローチの方法の検討をする。複雑化していく現代社会に生活していく子どもたちに今何がどう関わっていくのかまで考えて行かなくてはならないと言うのは過言かもしれないが、短時間とはいえ英語と言う一言語を介して子どもたちと何かを学んでいく時間と解釈すると言語学習のみにはすまされない責任も否めまい。ところで、時間的余裕を持てることで review の徹底を図ることも可能となってきた。そして、春夏秋冬の季節を適時に取り入れることでカリキュラムはより身近になってくる。開始時期の変更は子どもたちの1年間の成長を垣間見る機会になった。年長児とのつながりを考える上においても、カリキュラムの内容その他について、子どもたち側から提供される information を手がかりに activity を作り上げる機会を得ることにもなろう。いずれにしても、開始時期を繰り上げたことで得られるたくさんの利点を十二分に活用しなければならないであろう。

昨年より一実験として始められた年少児との顔合わせも、ある意味、とても意義ある試みと考えられよう。年少児は顔合わせ以後、英語の先生として私たちに挨拶を投げかける。どんなに距離が離れていようと「Hello!」「あ!英語の先生だ!」と口々に言う。ひそひそと言うこともある。しかしながら、顔合わせ以降、子どもたちの中に‘英語のひきだし’ができたとは言えないだろうか。それぞれの子どものそのひきだし或いはポケットの中に自然に英語が入っていくためにはどうすればよいのかを模索しながら進んでいっているわけである。

(上野 めぐみ)

2. 平成10年度の授業改善への取り組み

(1) 連絡ノートについて

本園ではここ数年、英語教諭と保育者との連絡を密に取ることで授業内容の改善と充実を図ってきた。園児が対象の英語の授業を行うにあたり、その授業の内容は、子どもの興味を引き付けるための英語教諭の工夫が見られる。授業時間が短い上、子どもの集中力は大人より短いためより短時間で効率よく、さらに、多くの子どもが初めて出会う英語に親しめるような授業が求められる。

年長組連絡ノート



年中組連絡ノート



(資料3-①)

連絡手段の中心は主に“連絡ノート”(右資料3-①参照)と呼ばれるB6判程度のノートである。ここに、連絡事項を記入して相互に交換しながら、次週への授業改善などを行っていた。“連絡ノート”は平成7年度より続けられており、内容については以下の3点である。

①事前の教材準備について

- ・授業開始前に保育者が準備しておくこと。(机, 椅子, ホワイトボードの並べ方など)
- ・授業に必要な物の用意と置く位置について。(テープデッキ, クーピーペンシルなど)

②曜日や日時の変更

- ・年度の初めに年間の行事を打ち合わせているが、保育の都合による急な日程変更があった時の振替について。
- ・英語教諭の都合による日時の変更について。

③内容の反省, 改善点

- ・その日に行った授業中の子どもの反応や様子。
- ・次回の授業へつなげていくために、テープのスピードが早く聞き取りにくい、絵カード類が見えにくいなどの場合は、速度調節ができるデッキの使用や、絵を大きく描いたり色を濃く塗るなどのことを提案する。

“連絡ノート”は週に一度、英語の授業が終わった後で受け渡されるが、急を要する場合やノートでは内容が不十分であるときは電話でも連絡を取ったり、話し合いをする時間を設けるなどの努力をしている。また、英語教諭と保育者それぞれに連絡係を決めているため、情報の行き違いが少なくスムーズにやり取りができていくほか、同じノートで引き継がれているため、

年度が替わり、担当の保育者や英語教諭が代わっても前年度の様子がわかるようになっている。

保育の流れの一環として、子どもたちが英語の時間を違和感なく受け入れられるためには、英語教諭と保育者との相互の密接なつながりは、年々重要になってきた。保育から英語の時間だけの数十分間を完全に独立して行うのは、かなり不自然である。英語が「楽しい」と思えるように保育者側も英語教諭とともに授業内容への改善に配慮していく必要がある。

(瀬戸 規子)

(2) 連絡ファイルの導入

平成10年度4月、新学期が始まるにあたり、新学年の担任と英語教諭との顔合わせが行われた。顔合わせは、ここ数年の恒例となっている。ここでは、昨年度の反省を生かし、年間カリキュラムや授業内容、日程、時間などについての話し合いを行う。本年度は、英語教諭側から“連絡ノート”の見直しが提案された。それは従来の連絡ノートのほかにさらに詳細に授業内容の疑問や改善点などを毎回指定の用紙に記入した上、今後の具体的な記録として残していくというものであった。

まず、用紙の作成・検討が行われた。あらかじめ英語教諭が用紙見本(資料3-②)を作成

していたため、それをもとに保育者側と相互に検討していき左図のようなB5用紙が完成した。

用紙は同サイズのファイルに綴じ、記録に残していくという試みである。これを連絡ノートと区別して“連絡ファイル”という名称で区別した。

現在、連絡ファイルは授業時に英語教諭が当日の授業内容を左端の欄に記入したものを保育者に手渡す。そして、降園後、保育者がその日の授業内容に対する意見や

()月()日 ()回目

授業内容	良い点	改善点
月の活動		
今週の活動		
質問に答えて		

(資料3-②)

疑問点、質問事項などを記入し、英語教諭に渡すと次の週に返答が返ってくるという形式で行われている。

連絡ファイルの導入によりさらに英語教諭と保育者が相互に細かく連絡が取れるようになり、授業内容の充実、改善にかなりの貢献をしていると思われる。

このファイルは、6月より年中組も年長組と全く同様の用紙を用いて連絡ファイルを使用し始めた。両学年共に、従来の連絡ノートと連絡ファイルの2冊を併用することで英語教諭との連絡が細部まで行き渡るようになるとともに、保育と英語とが以前より密着したものとなった

と思われる。その結果、連絡ファイルは毎週必ず使用するため連絡ノートより活用度が高くなり、授業改善におおいに役立つものとなった。実際、どのように英語教諭と保育者が連絡ファイルを使用し、授業が改善されていくかは具体的に事例をあげて次のところで説明することにする。

(山中 理恵)

(3) 授業内容の改善事例 (年中組・年長組)

〈年中組〉

事例1 英語の歌 (Hello, my friend, Weather Chants) H10.6/16

年中組は5月の第2週目より英語の授業が開始された。初めて英語に出会う子どもたちが親しみ抵抗なく取り組めるように、

挨拶や歌を中心に進められた。そして最初に導入されたのは、挨拶の歌『Hello, my friend』天気『Weather Chants』だった。1カ月後やっと歌えるようになった頃、次の歌が導入されたためこれらの曲は歌わなくなってしまった。英語開始当初、保護者からは、曲数を増やしていろいろな曲を聞きかじること大切だが、童謡と同じようにすぐ口ずさめたり、自信をもって歌えるような年間を通した歌も取り入れて欲しい、という声が上がっていた。

そのため連絡ファイルを通してそのことを伝えたところ、この2曲の歌に関しては授業の最初の歌として行う機会が多くなり全員が歌える歌となった。またその後、他の歌も授業内で復習という形で数週間おきに歌うようになり着実に覚えていくことができるようになった。

事例2 英語の歌 (Baa Baa Black Sheep, BINGO, Little Peter Rabbit) H10.6/23, 11/13, 17

英語の歌の導入は、英語教諭が絵カードを使って歌の内容を話し、その後動作をつけながら英語教諭の後について繰り返し部分の単語を言い、少しずつ repetition を長くして続けて言えるようにする。そしてそれらを数回繰り返し返した後、テンポの速い(ナチュラルスピードの)テープに合わせて歌うというやり方をしていた。しかし、そのテープのテンポのあまりの速さに「できない」「わからない」意識をもち傍観する子どもが出始めた。そのため連絡ファイルを通

(6) 月 (16) 日 (6) 回目

授業内容	良い点	改善点
① Greeting ② V. R. Body ③ T. P. R. walk run eat drink ④ Action song Open Shut. ⑤ Action color/number ⑥ Baa Baa Black Sheep	挨拶歌の導入が好評で、(お友達の歌)の導入も好評で、歌の楽しさを伝えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。	歌の歌詞を覚えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。
6月の活動	今月6月と7月間の間に、現在ある(お友達の歌)の導入も好評で、歌の楽しさを伝えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。	
今週の活動	19.10.16 (水) 19.10.17 (木) 19.10.18 (金) 19.10.19 (土) 19.10.20 (日)	
質問に答えて	Hello my friend の導入が好評で、お友達の歌の導入も好評で、歌の楽しさを伝えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。	

* Hello my friend の導入が好評で、お友達の歌の導入も好評で、歌の楽しさを伝えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。また、歌の歌詞を覚えることができた。

(資料3-③)

(11)月(27)日 (14)回目

授業内容	良い点	改善点
① Oppealing ② Little Peter Rabbit (2) ③ T.P.R ④ V.R	「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」	「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」
月の活動		
今週の活動		
質問に答えて	前回は「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」	

(資料3-4)

してその様子を伝え、幼稚園に常備している速度調節可能なデッキの利用を提案した。すると、英語教諭からは「長いフレーズはカットしながらゆっくり進め、通常のデッキを使いできるだけナチュラルスピードに慣れるように工夫していく」などの回答が出され、長い文はゆっくり繰り返したり、テープに合わせて歌った後にテープなしで子どもたちだけで歌う機会を作って

いった。

その結果、テープに負けないテンポで自信をもって歌う様子が見られるようになった。「子どもの能力は高いので、無理かな…と思わないでtryしたいと思う」という英語教諭の言葉に保育者も同意した。

事例3 Let's go Shopping H10.11/24

(11)月(24)日 (16)回目

授業内容	良い点	改善点			
① Oppealing It's sunny. It's cold. ② Let's go shopping! ③ Let's eat, drink T.P.R ④ What can you find through the hole?	「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」	「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」			
月の活動					
毎週の活動	20(日)	21(月)	22(火)	23(水)	24(木)
休	休	休	休	休	休
質問に答えて	前回は「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」 「お母さん、お父さん(お兄さん)は誰ですか?」				

(資料3-5)

2人の英語教諭が“ママ”と“店や”のそれぞれの役割に分かれ“ママ”に頼まれた野菜や果物を“店や”に買い物に行くと仮定して行われる授業があった。その中で子どもたちは自分たちの行動や数字と単語を組み合わせた語句を英語で言う。イスに座った状態で買い物に行く前には「Let's go shopping!」と掛け声をかけ買い物カゴを持つ真似をして体を左右に動かしながら「Shopping Shopping…」

と店やに行き「Two Apples and One Potato」などの“ママ”に頼まれたものを買ひ、行きと同じように体を動かしながら「Let's go home」と家まで帰るというものであった。ごっこ遊び

などで“なりきる”ことには慣れていた子どもたちだが設定が飲み込めず戸惑う様子がみられた。そのため連絡ファイルを通してその様子を伝え“ママ”役の教諭はエプロンを“店や”役の教諭はハチマキなどを行うことで役柄をはっきりさせ臨場感を与えるアイデアを提案した。

するとさっそく次の授業より取り入れて行うようになり、その結果、子どもたちも状況が理解でき楽しんで臨めるようになったようだ。またその後、英語教諭より「眼の前に何もなくても情景を思い浮かべられるようになって“物体”がなくても楽しめるの良いと思われます」との意見が出され、エプロンなどの小道具を使わない状態で会話と身振りを楽しむ授業も行われた。

その他

1年間の授業を終え連絡ファイルを見返したところ“授業内容”の部分に変化がみられた。授業内容は次の4項目で成り立っている。

- 1 Greeting
- 2 Song
- 3 T.P.R. (Total Physical Response)
- 4 V.R (Vocabulary-Rap), Story, Activity

1学期は授業のたびに順番が異なり(“1 4 3 2”や“1 2 4 3”など)子どもたちの様子や反応をみながら模索して進めている様子が窺える。その後、2学期に入り現在の形(“1 2 3 4”)が確定された。この進行は、子どもたちが受け入れやすい順序であったため、楽しみつつ落ちて授業が受けられるようになった。英語教諭側からの「今後も子どもたち、そして先生方とカリキュラムを通して成長していかれるようにと思っています。」という感想にもあるように、連絡ファイルを通して、両者が率直な意見を述べ疑問点を解決していくことで理解を深め、結果として成長にもつながってきていると思われる。

今後も、保育と一体になった英語教育を目指し、連絡ファイルをおおいに活用していきたいと思う。

(戸部 礼子)

<年長組>

事例1 Rhyme Training (おしり字集めゲーム) H10.4/20, 27 5/11

Rhyme Training とは、3つの単語の発音を聞いてその言葉の最後の音(音韻)が異なる一つの単語を聞き取る Training である。子どもたちはそれぞれ椅子を机がわりにしてグループごとに床に座る。そしてあらかじめ用意された犬・猿・猫の絵のついた三種類のペーパーサートを椅子の上に置き、ゲーム的に旗あげ方式で行われた。

約1カ月間行われたこの試みは連絡ファイルを活用して多くの問題点を改善しながら授業を進めていった。そこでこの改善点を以下4点に絞って事例をあげて述べることにする。

(4)月(20)日 (/)回目

授業内容	良い点	改善点
Spelling Introduction Song: Wheels on the bus Rhyme Training Johnny hamsters with four hamsters	先生の手で本が読まれていく様子が見てほしい。また上の子の音読も聞かせたい。	・上の子の音読と理解を促すための質問を工夫したい。 ・下の子の音読も促すための質問を工夫したい。 ・絵カードの活用も工夫したい。
4月の活動		
今週の活動	20(水) 英語 (年長) 20(木) 英語 (年中)	21(水) 英語 (年少) 22(木) 英語 (年中) 23(金) 英語 (年少)
質問に答えて	質問に答えて 先生の手で本が読まれていく様子を見てほしい。また上の子の音読も聞かせたい。	

(資料3-⑥)

の聞き分けの例題を出していくことで子どもたちには内容を少しずつ理解していく様子が見られた。

②子どもたちが授業内で使用するペープサートに関しては先程述べたが、問題が出題される

(4)月(21)日 (2)回目

授業内容	良い点	改善点
① Greeting ② Song: Wheels on the bus ③ Rhyme Training ④ Johnny hamsters	A・B・Cのカードが貼られた絵カードが貼られた。	絵カードの活用も工夫したい。
4月の活動		
今週の活動	21(水) 英語 (年少) 22(木) 英語 (年中) 23(金) 英語 (年少)	24(土) 英語 (年少) 25(日) 英語 (年中)
質問に答えて	質問に答えて 先生の手で本が読まれていく様子を見てほしい。また上の子の音読も聞かせたい。	

(資料3-⑦)

その結果、次週にはそれぞれが赤・緑・青の各色に縁取られ、見やすくなる

とともにゲームの内容も少しずつ理解していく様子が見られるようになった。

①導入当初、このゲームの内容が理解できないまま、周囲の子に合わせて旗あげをし、戸惑う子どもが多く見られた。そのため、連絡ファイルを通して、英語教諭に「Rhyme遊びをする前

どの程度まで内容を理解しているか再確認して欲しい。」と提案した。その結果、授業を始める前にすぐに本題にはいるのではなく、簡単な「音韻」

設置されているホワイトボードに貼られる。子どもたちはこの絵カードを見て自分のペープサートで答えに該当するものをあげていた。しかし、授業中子どもが絵カードに対して理解できずに困惑している表情をしているのが窺われた。そのため、連絡ファイルを通して、犬・猫・猿の絵のついたペープサートと絵カードを見やすくするために縁を色ど

ることを提案した。

見やすくなると同時にゲーム

以上のように改善していくことで子どもたちも出題内容を理解し次回のゲームを楽しみにする様子が見られるようになった。英語教諭と保育者とがお互いに試行錯誤し授業内容を工夫した結果、英語教諭から「子どもたちがスムーズに英語を習得していく様子が驚きを感じ、達成感を得ることができた。」との感想が聞かれた。このことから連絡ファイルが機能的に活用され授業内容によく反映された事例といえると思われる。

事例2 Big Book (The Three Little Pig: 三匹の子ぶた) H10.11/9.16

Big Book とは、普通の絵本に比べて子どもに見やすく作られた大型の絵本である。導入時

は、英語教諭が絵本の読み手となり英語で物語を読んでいく。年中組の頃からこの絵本に慣れ親しんできた子どもたちは、今回新しく導入された『三匹の子ぶた』の絵本も内容も知っていることもあり、とても楽しんで聞いている様子が見られた。特に、英語教諭が三匹の子ぶたと狼の声色を変化させたり、簡単な手や足の動作をつけて読むことでより楽しむ様子が見られた。そこで、この読み聞かせをさらに発展させた活動(フルーツバスケット形式のゲーム)が導入されることとなった。そこで、連絡ファイルを通して、英語教諭と保育者が事前に授業内での椅子の隊形移動について短時間でできるように話し合った。

その結果、事前の打ち合わせ通り英語教諭と保育者の連携で速やかに椅子の隊形移動ができ、『三匹の子ぶた』のフルーツバスケットを子どもた

(11)月(9)日 (17)回目

授業内容	良い点	改善点			
① In a cabin ② The Three Little Pig	2項目の「うさぎ」, 10時 15分までと見直し 15分間 ①の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ②の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ③の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる	①の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ②の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ③の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる			
月の活動					
今週の活動	9(A) 英語 7時45分	10(B) 園外保育 11時15分	11(C) 自由遊び 11時45分	12(D) 園外保育 12時15分	13(E) 体操
質問に答えて	2週間ぶりの英語と英語の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ①の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ②の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ③の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる				

(資料3-⑩)

(11)月(16)日 (18)回目

授業内容	良い点	改善点			
① In a cabin ② The Three Little Pig	①の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ②の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ③の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる	①の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ②の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ③の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる			
11月の活動					
今週の活動	16(A) 英語 7時45分	17(B) 園外保育 11時15分	18(C) 自由遊び 11時45分	19(D) 園外保育 12時15分	20(E) 体操
質問に答えて	2週間ぶりの英語と英語の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ①の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ②の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる ③の「うさぎ」を「うさぎ」に置き換えて 声に気をつけて聞かせる				

(資料3-⑪)

ちもより楽しんで参加する様子が見られた。

また、その後ゲームで使用する子どもたちの絵表示（子ふた①、子ふた②、子ふた③、狼の絵のついたペンダント）の色が薄く見にくく、特に子ふたの区別がわかりにくかった。そこで、連絡ファイルを通して、次週までに色を濃く塗り分けてもらうことで絵表示も見やすくなりゲームでの移動の指示も2種類、3種類、全部などを取り入れ工夫することでさらに子どもたちが喜ぶ様子が見られた。

2学期に入り回数を重ねるごとに、机を使用しないほうがより活動的に子どもたちが授業に参加できるように思われた。また、英語教諭からも「机がないほうが子どもたちが活動的に動けると思う。」という意見や「子どもたちに合った言葉かけの必要性があるのではないか。」という意見も聞かれた。英語教諭と保育者が相互に話し合い、意見を出し合うことで少しずつ考えがより一貫性のあるものとなってきたと思われる。連絡ファイルでのやりとりの結果、子どもたちもさらに楽しい英語の時間が送れるようになったのではないだろうか。

(西村 有美)

(4) 今後に向けて

平成10年度は従来の“連絡ノート”の使用に、新しく“連絡ファイル”の使用を始めたことが最大の改善事項であった。英語教諭との連絡方法は連絡ノート・連絡ファイル・電話連絡の三本柱で行われたが、1年間を振り返ると、連絡ファイルが最も活用された。この利点は、直接的に授業内容の疑問点や改善点を英語教諭と保育者が具体的事例をあげてお互いに歩み寄り、話し合い、意見を出し合うことができたからではないだろうか。

4年前、連絡ノートを始めた当時はその活用事例は、スケジュールに関するものがほとんどであった。しかし、それは英語教諭と保育者が一体となって英語の時間を作り上げるという考えへの先駆であったように思える。年々、連絡ノートの活用回数も増え、英語の中に日常の保育の中での出来事を取り入れ、子どもの園生活の中で英語の時間だけが独立したものとしなないようにすることの重要性を英語教諭も保育者もお互いに意識するようになってきた。そのためには、従来以上に両者が密に接することが大切とされた。その考えの下に今年度の連絡ファイルの導入があったのである。各学年（年中組・年長組）の英語終了後、担当保育者を中心に必要事項をファイルに記入し、英語教諭に渡すという繰り返して1年間ファイルを活用した。ファイルの中身もかなり蓄積され、今後年間記録としても保存され、活用されることが期待できるのではないだろうか。

来年度に向けて、平成10年度は、試行的に用紙を作成したため、再度より記入しやすいように用紙の見直しが必要とされる。結果的に形態としては、今後もこの連絡ファイルを継続していくことができるのではないだろうか。

(山中 理恵)

3. 本園の英語教育に対する保護者の意識

(1) アンケートを実施するにあたって

本園で昭和40年代より取り入れている英語教育は、時代や状況とともに移り変わっている。このことについては、昨年の研究の中で述べた通りである。そしてどの変化も、より良い英語教育を目指しての取り組みだったと思われる。

それらを改めて見直し、さらに「子どもにとってより良いもの」を目指していこうと、現在、年間の研究テーマを「英語」に設定して、英語の時間の子どもの様子や活動内容を記録につけたり、勉強会や話し合いの時間を作っている。平成10年10月に文京区民ケーブルで放映された幼稚園紹介においても、本園は英語教育を取り入れていることを大きく取り上げて紹介された。

このような取り組みに対して、実際に本園に通園している子どもの保護者はどう感じているのだろうか。保護者の意識を知るために、幼児期の英語教育に関する考えや家庭内での英語環境についてのアンケートを行った。

アンケート実施日	平成10年5月20日
対象者	年中組（4歳児）、年長組（5歳児）保護者
対象者数	124名（年中組61名、年長組63名）
回答数	105名（年中組53名、年長組52名）

年中級・年長級保護者の方へ
平成18年5月20日
文京女子大学文京校校務課
アンケートのお願い
～年長の英語教育について～

本園では創立者・渡島節子、青柳美・島田千両先生の先見と理念のもと、英語教育を早くから保育の活動の中に取り入れ実践してきました。園内研究として平成9年度は文京女子大学人語学部の紀實にその成果をまとめました。本年度も引き続き保育の中で、どのように子どもたちに働きかけのよさに興味を持たせたいかの学習方法を求め、英語教育の成果を定量化していきたいと取り上げました。参考として下記のアンケートにご協力くださいますようお願いいたします。

I. 本園を選んだ理由 (いくつでも○印可)

園庭の広さ 制服 雰囲気 園舎 交通 アスレチック
 畑・栽培 遊具 保育内容 園行事 お泊り保育
 英語 体操 給食 海外教室
 その他 ()

II. 英語教育を導入していることについて

必要 必要ではない理由 ()
 → 必要とお答えの方にお伺いします
 ①英語教育は子どもにどのようなプラス面があると思われますか。
 ()

②幼稚園での英語教育にどの程度期待しているか (いくつでも○印可)

- ・英語の音に慣しむ
- ・英語の歌に慣しむ
- ・簡単な挨拶ができる
- ・簡単な単語がわかる
- ・将来的に役に立つから
- ・異文化への興味をもつようになる
- ・外国人に訪会した時などに慣れろをもつ
- ・その他 ()

III. 参考までにご両親に英語への関心についておたずねします。
 ①日常会話はできますか

はい () いいえ ()
 → どの程度 ()

②お子さんは半年以上の外国生活の経験がありますか

ある () ない ()
 → 年 () 月 ()

IV. その他 何かご意見がありましたらお聞かせください。
 ()

くみ さまえ
 英語教育の推進に協力をお願いします

☆アンケートは5月25日(月)までに各クラス担任にご提出ください。
 よろしくお願致します。

III. (年中級の保護者の方へ)
 英語の時間が増えましたが、お子さんから英語についての感想ができましたか。
 はい () いいえ ()
 → どの程度 ()

IV. (年長級の保護者の方へ)
 ①一年間の英語の時間を通して、お子さんに何か英語に対しての変化がありましたか。
 はい () いいえ ()
 → どの程度 ()

②絵本貸し出し日にお子さんが英語の絵本を借りてきたことがありますか。
 ある () ない ()
 → どの程度 ()

③今年度から増設された英語のみで子どもたちと会話をしています。それについて、お子さんの反応や保護者の方の意見をお聞かせください。
 ()

V. ご家庭に子ども向けの英語の本やビデオなどがありますか。
 ある () ない ()
 → 絵本 ()
 名前 ()
 ビデオ ()
 その他 ()

VI. 生活の中で英語に触れる機会がありますか。
 ある () ない ()
 → 旅行 知人 映画・観劇 ()
 習い事 TV(番組名:) ()
 その他 ()

アンケートの設問の意図を、以下に記す。

I, 入園の際の選択肢に、英語教育が入っているかどうかを知る。(複数回答)

II, 幼児期に英語教育を行う必要性を感じているか。

①必要だと思う場合、その理由。

②何を期待しているのか。

を具体的にたずねる。(記述式)

III, 1回目の英語の時間後の、年中組の子どもの反応を知る。

IV, ①1年間の英語教育で子どもにどんな変化や成長があったと感じているか、保護者の意識を知る。(記述式)

②子どもが英語の絵本に関心を示しているか、また、その時家庭ではどう対応しているかを知る。(記述式)

③英語講師の新しい試みに対する子どもや保護者の反応を知る。

V, 家庭内で英語に触れる機会があるかをたずねる。

VI, 園生活以外で英語に触れる機会があるか、ある場合、具体的にどのような場面かをたずねる。

VII, ①子どもの環境として、両親の英語への関心・習熟度をたずねる。

②幼稚園での英語の時間以外に英語教育の経験があるかを知るために、子どもの外国生活の経験をたずねる。

VIII, その他、保護者からの意見や提案があるかをたずねる。(記述式)

(有賀絵美子)

(2) 年度当初のアンケート (平成10年4月)

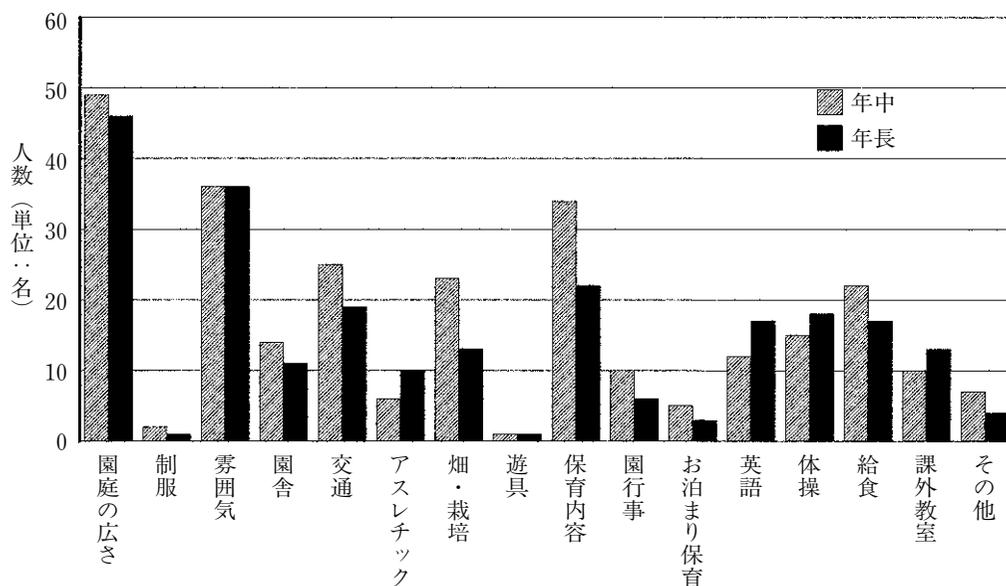
*一部抜粋して結果を報告する。

I. 本園を選んだ理由 (いくつでも○印可)

園庭の広さ 制服 雰囲気 園舎 交通 アスレチック
 畑・栽培 遊具 保育内容 園行事 お泊まり保育
 英語 体操 給食 課外教室
 その他 ()

年中保護者			年長保護者			中・長保護者		
順位	選択肢の内容	回答数 全回答数	順位	選択肢の内容	回答数 全回答数	順位	選択肢の内容	回答数 全回答数
1	園庭の広さ	49/53名	1	園庭の広さ	46/52名	1	園庭の広さ	95/105名
2	雰 囲 気	36	2	雰 囲 気	36	2	雰 囲 気	72
3	保 育 内 容	34	3	保 育 内 容	22	3	保 育 内 容	56
4	交 通	25	4	交 通	19	4	交 通	44
5	畑 ・ 栽 培	23	5	体 操	18	5	給 食	39
6	給 食	22	6	英 語 ★	17	6	畑 ・ 栽 培	36
7	体 操	15	7	給 食	17	7	体 操	33
8	園 舎	14	8	畑 ・ 栽 培	13	8	英 語 ★	29
9	英 語 ★	12	9	課 外 教 室	13	9	園 舎	25
10	園 行 事	10	10	園 舎	11	10	課 外 教 室	23
11	課 外 教 室	10	11	アスレチック	10	11	園 行 事	16
12	そ の 他	7	12	園 行 事	6	12	アスレチック	16
13	アスレチック	6	13	そ の 他	4	13	そ の 他	11
14	お泊まり保育	5	14	お泊まり保育	3	14	お泊まり保育	8
15	制 服	2	15	制 服	1	15	制 服	3
16	遊 具	1	16	遊 具	1	16	遊 具	2

本園を選んだ理由



・英語を園の選択理由に選んだ保護者

年中組－53名回答中12名

年長組－52名回答中17名

合計－105名回答中29名

このことから、約1/4の保護者が英語を選択しており、保護者の内4人に1人が入園希望理由として本園で行われている英語教育を重要視していると言えよう。

しかしながら、この質問は内容が重複している項目もあり、また、複数回答を可能にしたため、選択されたもののうちどちらが優位なのか判断しにくいという点があった。そのため、次回（平成11年3月）のアンケートでは、上位3位までを選択する方法に変えて実施することが望ましいと考えられる。

II. 英語教育を導入していることについて
 必要 必要ではない→理由 ()
 ↳必要とお答えの方にお伺いします
 ①英語教育は子どもにどのようなプラス面があると思われますか。
 ()
 ②幼稚園での英語教育にどの程度期待しているか (いくつでも○印可)
 ・英語の音に親しむ
 ・英語の歌に親しむ
 ・簡単な挨拶ができる
 ・簡単な単語がいえる
 ・将来的に役に立つから
 ・異文化へ興味をもつようになる
 ・外国人に出会った時などに親しみをもつ
 ・その他
 ()

・幼稚園で英語教育を行う必要性を感じている

保護者の割合

年中組－53名回答中50名 (94.3%)

年長組－52名回答中45名 (85.6%)

合計－105名回答中95名 (90.5%)

以上のことから英語教育を導入していることについては90%を超える保護者が必要と感じている結果となった。

・幼稚園で英語教育を行う必要性を感じていない

保護者の割合

年中組－53名回答中1名 (1.9%)

年長組－52名回答中2名 (3.8%)

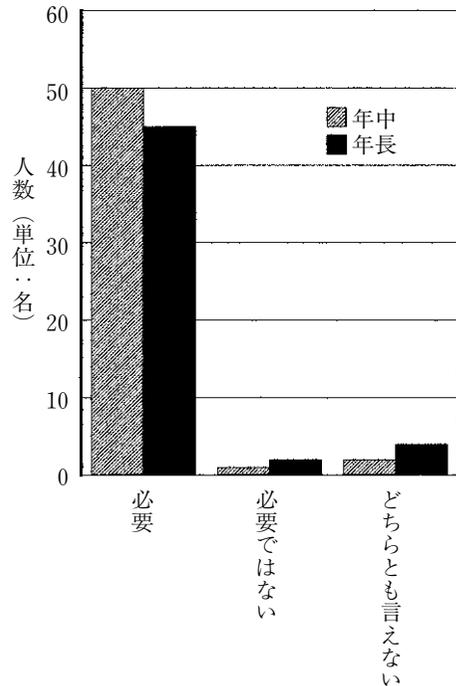
・「どちらとも言えない」と答えた保護者の割合

年中・年長組合計－105名回答中6名 (5.7%)

必要性を感じない、または、どちらとも言えない理由は以下のような意見によるものである。

- ・卒園後、日常的に英語に接していなければ忘れてしまう。
- ・小学校時代は英語の授業が無いので、空白の時間になってしまう。
- ・まだ興味を持たない子どももいると思う。

英語教育の導入について



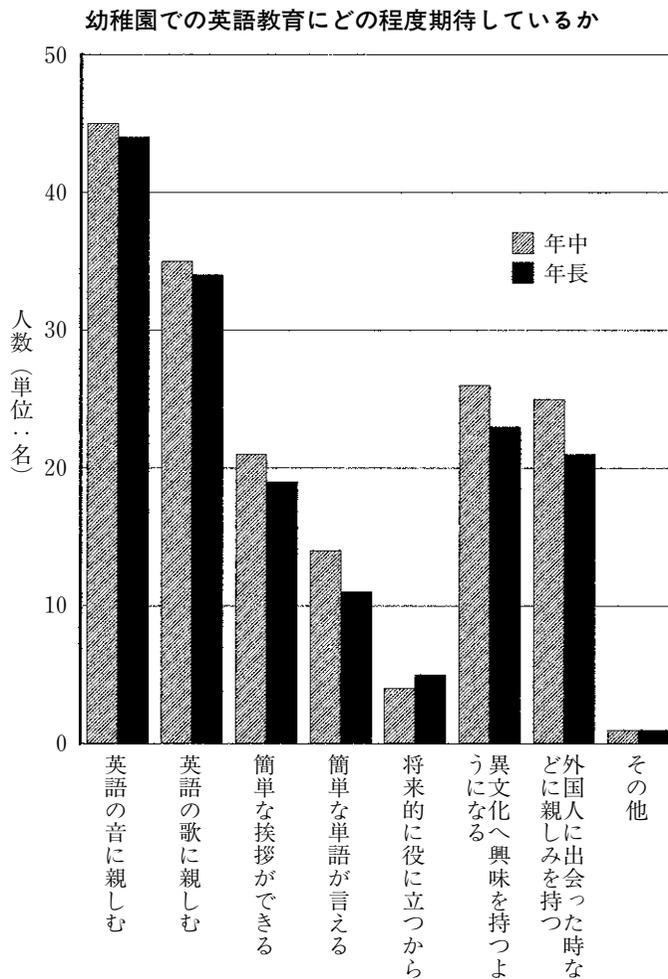
- ・ 幼児期に英語に親しむ機会を持つことには賛成だが、保育時間内に設ける必要性は感じない。

①英語教育を必要と感じている理由

自由記述式でたずねたところ、以下の7項目に分類することができた。

- ・ 言語習得（発音・聞く力）の時期的な面から （28名）
- ・ 異文化への認識・興味を持つ （21名）
- ・ 自然な形で親しむ・身近に感じる・慣れる （21名）
- ・ 将来学ぶ時に役立つ・抵抗感が減る （15名）
- ・ 興味を持つ （8名）
- ・ 視野が広がる （8名）
- ・ 時代の要請 （6名）

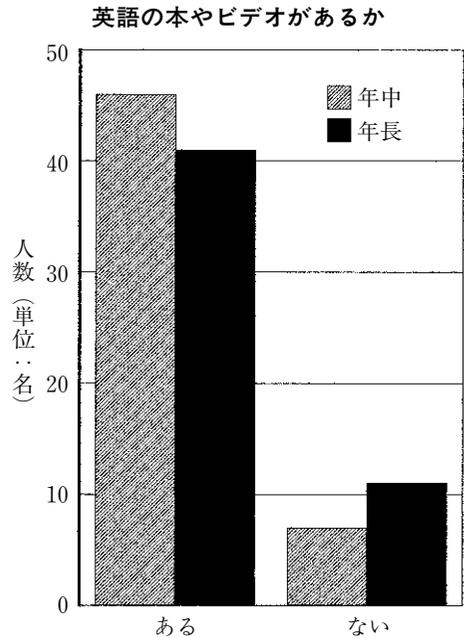
②幼稚園での英語教育に保護者が期待していること



V. ご家庭に子ども向けの英語の本やビデオなどがありますか。

ある	ない		
→ 題名	{	絵本 ()	
		ビデオ ()	
		その他 ()	

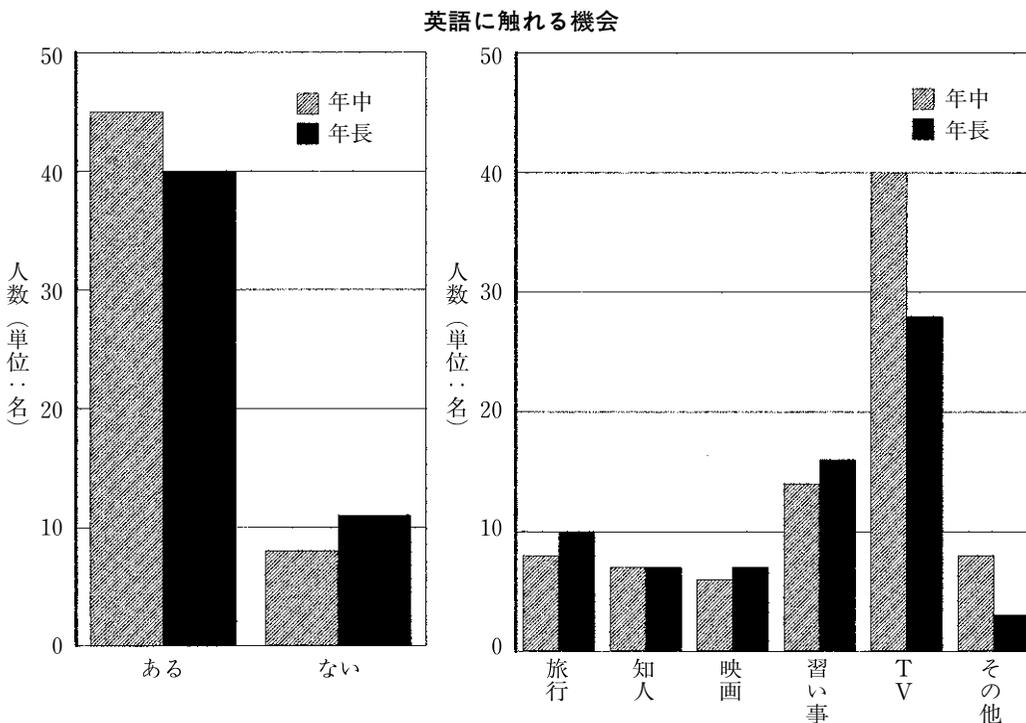
- ・ 英語の本やビデオなどがある家庭
 - 年中組—53名回答中46名 (87%)
 - 年長組—52名回答中41名 (79%)



年中・年長共に幼稚園以外でも約80%の家庭では、英語に触れる環境にあることがわかる。その内容は、絵本・ビデオでは人気アニメのキャラクターが出てくるものが多く、特に、視聴覚に訴え、子どもも集中しやすいビデオが、70%もの家庭に存在する。次に絵本と続くが、聴覚のみのCDやカセットテープはあまり使われていないことがわかる。

VI. 生活の中で英語に触れる機会がありますか。

ある	ない
(旅行 知人 映画・観劇) (習い事 TV (番組名:)) (その他 ())	



・英語に触れる機会のある家庭

年中組—51名回答中45名 (88%)

年長組—47名回答中37名 (79%)

年中・年長共に、幼稚園以外でも英語に触れる機会をさまざまな場面で設けていることがわかる。共に一番多いものは「英語であそぼう」「セサミストリート」などのテレビ番組で、年中組では88%、年長組では70%の家庭で見られている。

2番目は、英語の習い事であり、年中組では14名 (31%)、年長組では16名 (40%) の子どもが幼稚園以外で英語のレッスンを受けている。

3番目に海外旅行があがった。年中組では8名 (17%)、年長組では10名 (25%) の家庭で海外旅行をし、外国人と接する経験をしていることがわかる。これは、地域性による生活水準の高さと、II-①に見られるように、子どもたちに異文化への認識や興味をもって欲しいと望む保護者の意向も影響しているであろう。

VIII. その他何かご意見がありましたらお聞かせください。

()

年中・年長組の保護者のうち21名から回答が得られた。代表的な意見は次のような内容である。

- ・日常保育の中でもつながりが欲しい
- ・毎朝20分位、必ず歌を入れて欲しい
- ・外国人の子どもたちと遊べる機会があるといい
- ・遊びを主体とした英語の時間を希望
- ・英語の楽しさを子どもに伝えて欲しい
- ・発音を正しく教えて欲しい
- ・言葉と言動に結び付きのある英語を望む
- ・親子で歌えるようにカセット、楽譜などが欲しい
- ・ビデオなどを紹介して欲しい
- ・外国人の先生と居る時間が欲しい
- ・このまま続けて欲しい
- ・小学校でも関われる環境が欲しい
- ・週1回の英語には何も期待していない
- ・子どもが忘れないように親も英語で話しかける努力が必要

幼稚園の英語の時間の内容に対する提案が多いが、保護者が家庭でも英語に慣れさせたいと望んでいる意見も多く見られた。

(3) 年度末 (H11. 3) のアンケート

2回目のアンケートは、年中組1年間 (H10. 5～H11. 3)、年長組2年間 (H9. 5～H11. 3) の授業を経験した子どもの保護者にたずねたものである。

1年間、もしくは2年間の英語の授業を経験した子どもたちの成長を、保護者がどのように捉え、考えているのかを知ることに目的を置いて実施した。

アンケート実施日 平成11年3月10日

対象者 年中組 (4歳児)、年長組 (5歳児) 保護者

対象者数 121名 (年中組60名、年長組61名)

回答数 76名 (年中組35名、年長組41名)

アンケートの設問の意図を、以下に記す。

- I. 入園の際の選択肢に英語教育が入っているかどうかを知る。(上位3項目まで)
- II. 1年間(年中組)または2年間(年長組)の英語教育で子どもにどんな変化や成長があったと感じているか、保護者の意識を知る。(記述式)
- III 1 ① 1年間の経験をふまえ、保護者が、次年度への英語教育に望むことを知る。
- 2 ① 2年間の英語教育で子どもにどのようなものが育ったと感じているか、また授業の感想などを具体的にたずねる。
- ② 小学校以降の英語教育への期待感をたずねる。

年中組・年長組保護者の方へ

平成11年3月10日
文京女子大学文京幼稚園

アンケートのお願い
～本園の英語教育について～

前回のアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。
更に、幼稚園での英語教育を充実させるため、保護者の方のご意見や、
お子様の様子 を、お聞かせいただきたいと思います。
つきましては、下記のアンケートにご協力下さいますよう、
よろしく願いいたします。

I. 本園を選んだ理由を、上位3つ○をつけて下さい。

園庭の広さ 畑・栽培 給食 体操 英語
交通(立地条件など) 課外教室

II. 一年間の授業を終えて

・変化があったか

あった どちらでもない ない

↓
内容

III. (年中組の保護者の方へ)

・ 来年度に望むことはなんですか

(年長組の保護者の方へ)

①本園での英語教育の感想を具体的にお聞かせ下さい。

②卒園後、幼稚園での英語教育がどのように活かされると思いますか。

以上

ご協力ありがとうございました。

I. 本園を選んだ理由（上位3項目）

今回のアンケートでは、本園を選んだ理由の中に、「英語」がどれだけ占めていたのかを、さらに詳しく知るため、上位3項目のみを選択するという形式をとった。

英語を園の選択理由に選んだ保護者

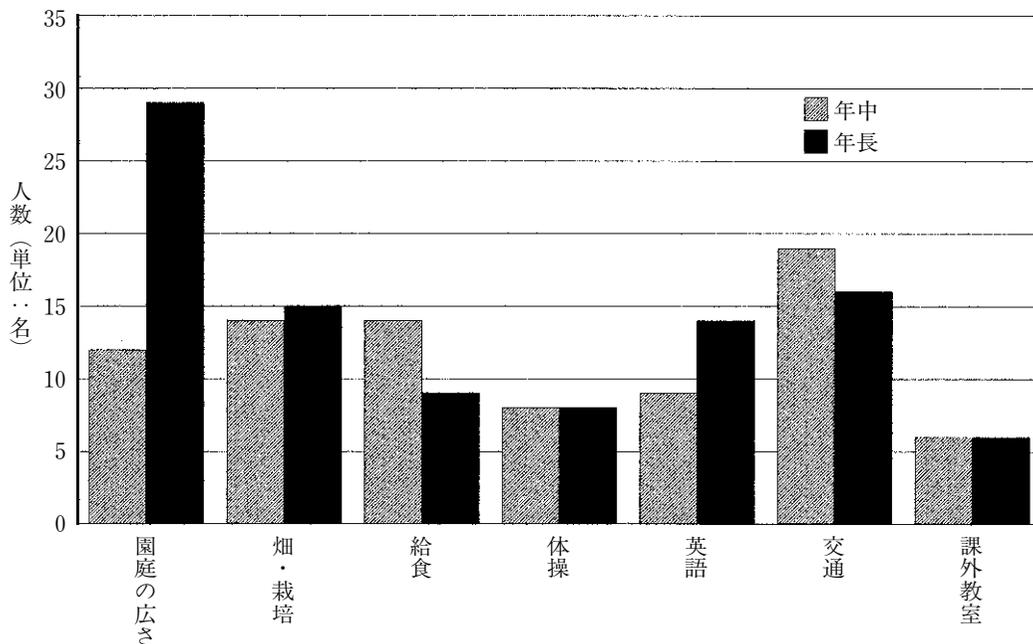
年中組—35名回答中9名

年長組—41名回答中14名

合計—76名回答中23名

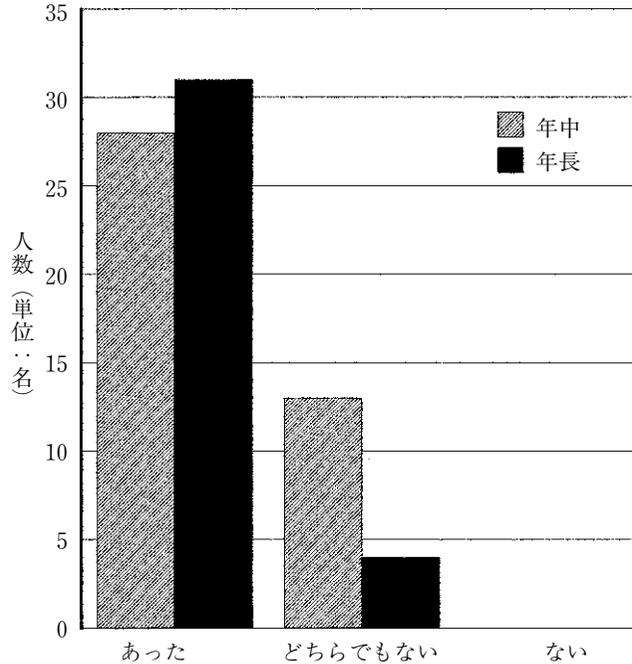
この結果を見てみると、年中組年長組共に「英語」は、7項目中4番目に多く選ばれていたことがわかった。しかしながら、それ以上に多く選ばれていた項目は、「園庭の広さ」、「交通(立地条件)」、「畑・栽培」、「給食」となっており、すべて環境的な要因であると言えよう。これは文京区という地域性、また毎日通う場所であることからこそ何よりも重要視する要素である。さらに、それらの条件に続き、「英語」が園の選択理由に選ばれていたことは、保護者の関心の高さを示していると思われる。

本園を選んだ理由(上位3項目)



II. 1年間の授業を終えて

変化があったか



		年中組	年長組
英語への興味	①言語として（英語に興味を示す）	…… 4名	7名
	②アルファベットに関して	…… 7名	1名
	③言葉に関して（英単語、数、挨拶など）	……25名	7名
	④歌	……17名	12名
	⑤その他（英語を楽しみにするなど）	…… 2名	0名
国際感覚	①外国人に対して	…… 2名	1名
	②世界の広がりがでた	…… 2名	1名
	③言語の違いに気づく	…… 0名	2名
どちらでもない		…… 3名	13名

III. 年中組の保護者の方へ

来年度に望むことはなんですか。

ここでも自由記述の形式を取ったため、様々な意見が寄せられたが、代表的なものは以下の通りである。

多数見られた意見

- ・今までのように楽しく授業を進めてほしい。
- ・英語を自然に身につけられるようにしてほしい。
- ・英語の授業に関して、時間・回数・参観の機会を増やしてほしい。

その他の少数意見

- ・良い発音・音を聞かせてほしい。
- ・習った英語の歌の歌詞がほしい。
- ・簡単な単語を教えてほしい。
- ・授業以外にも英語に触れる機会を増やしてほしい。

このように、英語の授業内容についての要望が多く見られた。さらに、国際感覚からくる希望や意見もあったので、以下に記す。

- ・外国人の存在や、世界はつながっているという感覚が身につくとよい。
- ・英語を学ぶことを通し、世界には様々な言語・文化があることを知ってほしい。

年長組の保護者の方へ

①本園での英語教育の感想を具体的にお聞かせください。

英語の授業参観、家庭での子どもの様子を見ての感想

- ・英語を楽しみながら、自然に取り組むことができた。
- ・英語の授業を毎回、楽しんでいた。
- ・英語の歌を覚えられたことが良かった。
- ・英語に対して興味を持ったことが良かった。

このようにプラス面としての受け止め方が多数であった。一方、少数ではあるが、以下のような意見もあった。

- ・課外で英語を習っていない子どもは、授業を楽しむところまでいっていないように思った。
- ・子どもが英語に対する興味をあまり示していない。

要望としての意見は、以下のようなものがあげられた。

- ・外国人との交流があると良かった。
- ・授業内容・カリキュラムを教えてほしかった。

国際感覚からくる意見

- ・外国やいろいろな言語があることを知ることができた。
- ・外国の文化に少しでも触れたりすることは大切である。

年長組の保護者は、2年間子どもが英語を学んだことにより、様々なことを手応えとして感じている。さらに、英語教育の必要性を強く感じていることが、この感想にも表れているといえよう。

②卒園後、幼稚園での英語教育がどのように活かされると思いますか。

ここでは、2年間幼稚園で学んだ成果が今後どのように活かされるかをたずねたが、興味深い結果が表れている。最も多かった意見は、

・小学校（またはその先も含めて今後）で英語教育が導入された時は、抵抗感がないと思う。というものであり、次いで、

・今後活かすためにも英語習得の努力は続けたい。

・自然に英語に関わることができると思う。

など、具体的に書かれているものが多く見られた。その他には、

・外国人に対して違和感を持たなくなると思う。

・外国人とのコミュニケーションが取れるようになると思う。

・異なる言語を知るのは良いことであり、より大きな世界観を持てるのではないかと。

といったように世界に目を向けている意見も複数あげられていた。

保護者は、2年間の英語教育に対し、“成果があったもの”と受け止め、また今後も何らかの形で生きていくものと捉えていると言えよう。

この質問に対し、

・英語教育を取り入れている小学校が少ないため、個人的に英語を学ばないと、活かさないのではないか。

との意見は、予想に反して2名のみであったこともやや意外とも思われる結果であった。

(4) アンケート結果から

これまで述べてきたように、(2)の年度当初のアンケートは、保護者の英語教育への関心や意識を知ること、また家庭において子どもがどの程度、英語と関わっているのかを知ることが主な目的として行った。

これは、本園でも初めての試みであり、英語教育に対して理解を示している保護者が多い反面、反対意見もかなり寄せられるのではないかと予想していた。

結果としては、各項目で示したように保護者の関心度は大変高いことがわかった。導入していることに対しても、全体の90%を超える保護者が必要性を感じ、幼児だからこそ自然に取り組める、良い時期であることを意識していることが窺える。

また本園では、何らかの形で英語との関わりをもつ機会がある保護者が多く、そのことから英語教育への関心が高いと思われる。英語のビデオや絵本を持っている家庭もかなりあり、またテレビの子ども向け英語番組も多くあげられていた。子どもたちは、日常的に英語と触れあう環境にあると言える。

その他、幼稚園の英語以外にも習い事に通い、レッスンを受けている子どもも予想以上に多くいることがわかった。

1 回目のアンケート実施10カ月後に、(3)年度末のアンケートを実施した。年長組は約2年間、年中組は約10カ月間、英語の授業を受けたことに対し、感想や意見を求めたことによって、保護者の意識がどのように変化したのかを知ることができた。

保護者は、英語の授業を参観したり、子どもが日常生活の中で英語の歌を歌ったり、単語を自然に発する姿を見ることによって、成果があったことを感じていたと言える。また、そのことを、子どもの成長の喜びとして感じるだけでなく、各項目において、国際感覚への意識と受け止められる意見の見られたことは、大変興味深い点であると思われた。

(益田 薫子)

考 察

今回は、平成9年度の紀要(創刊号)に掲載した内容に引き続き、「より良い英語教育に向けての取り組み」をテーマに2年間を費やし、研究したものをまとめた。

本園では、保育活動の中に英語教育を取り入れるにあたって様々な方法を取ってきたが、特にこの数年間は、子どもが英語に無理なく自然に取り組めるような配慮をしてきた。

その一つとしては2章で述べたように、英語が幼稚園生活の中で、他の活動と全く関連のない「突出したもの」とならないようにするための工夫である。例えば英語の授業のスケジュール調整を始めとして、英語教諭にも日常の園生活の流れや、園で取り上げている季節感の概念や行事などを理解してもらうようにしたことも大きな点である。このことにより、英語の授業に子どもの園生活に密着した内容が盛り込まれ、子どもにとって英語がより親しめるようになってきた。

幼稚園生活の中には多くの行事や様々な活動があり、英語教育はその中のひとつと考えている。担当する英語教諭は大学で授業を持っており、本園には英語の時間を設けている曜日にのみ来園する状況であるため、両者が連携を取ることは難しい。

そこで「連絡ノート」や「連絡ファイル」を有効活用するようになったのである。これらを使って、毎週授業の記録を残し、保育者が授業内容の改善点を伝えたり、授業における活動の意図を英語教諭から聞くことにより、両者の相互理解を深めることとなった。

「記録に残す」ことは、授業の効率を上げるだけでなく様々な利点が得られている。例えば学年を担当する保育者が年度ごとにも変わっても、年度始めに前年度分の授業記録を読むことにより、1年間の流れを知ることができ、見通しをもって計画を立てられることにもなるのである。このように数年間をかけて過去の反省点を改善し、互いの前向きな努力によって本園独自の英語教育のスタイルを作り出してきたと言えよう。

また本園に英語教育が導入され、約40年が経過したが、これまで本園の英語教育について保

護者がどのような意識を持っているかを園側からたずねる機会はなかった。

3章で述べたように、今回の調査結果により、本園の保護者は保育内容に英語を導入していることをかなり前向きに捉えていた。日常会話以上の英語力を持つ保護者は、全体のほぼ半数であり、日常生活の中でも英語に触れる機会を持っている家庭が多いこともわかった。

このことは、本園の所在する「文京区の地域性」が大きく関係していると思われる。

英語教育を肯定する保護者の中には、我が子が将来的に学校教育の中で英語を学ぶ時に「異和感や抵抗感を持たずに、自然に取り組めるように」との期待感も調査結果に多く表れていた。これは、英語教育の開始する時期を“中学校から”と捉えているだけでなく、“小学校から”との意識も持っていると思われる。すでに私立小学校では、導入されている所のほうが多く、また本園の所在する地域の、ある公立小学校では平成9年度より文部省の研究開発校として英語教育に取り組んでいる。つまり“将来”とは言えども、先のことではないといった実感を持っているのである。

また、“国際化”への意識が高まってきているため、英語を学校教育で学ぶことだけでなく「将来的に必要なもの」として捉えていることも今回の調査で明らかとなった。時代の要請とも言えるが、英会話ができたり外国人と抵抗感なくコミュニケーションを取れることが国際人として必要と考えられている。

今後このような背景を考慮しながら、保育の中の英語教育をより充実させていきたい。保育者と英語教諭との連携がさらに密になることにより、日常保育と英語教育の時間が自然な形でつながりを持ち、子どもにとって英語がより身近なものとなるよう努力したいと考える。

(益田 薫子)

おわりに

ことばを覚えやすい幼児期は、英語も母国語と同じように、抵抗感なく慣れ親しむことができる。2002年以降には小学校にも外国語教育を導入すると、文部省の方針が示されているが、本園児が保育時間内の生活の一部として、遊びや歌・ゲームなどで英語を習得したことが、この先の学校教育につながっていくことが望ましい。

これまでの英語の授業は年長組・年中組を対象としてきたが、この研究を進めることにより、保育者全員がそれぞれの学年の成長発達をふまえた上での、カリキュラムや授業の展開方法を学ぶことができた。また紀要研究にあたっては、現在本園で英語の授業が行われている年中・年長組の担当保育者が主に授業に関する項目を担当し、年少組の担当保育者はアンケート集計やグラフ作成などを行った。このような取り組みにより、保育者全員が本園の英語教育を再確認する機会となったと言える。

一方、子どもたちの興味と習得の様子から、今後は年少組にも体を使った活動を中心に、楽

しみながら無理なく「英語に触れる」体験を保育活動に取り入れたいと考えた。このことについては、来年度の紀要研究のテーマとし、次号で発表する予定である。

また、本園の英語授業と取り組みについて、平成11年10月には文京区の区民ケーブルチャンネルで「英語に親しむ」のテーマで取材・放映された。地域の方々にはもちろん、園児の保護者からも、英語教育の教材や内容の充実のための英語教諭と保育者との連携や、授業での子どもたちの英語の発音やリズムを楽しむ表情から、その成果が大きく評価された。

21世紀には、さらに国際化が広がり、世界共通語としての英語の役割も大きくなり、「話せる英語」の初めの一步として、この幼児期になれ親しんで欲しいと願うものである。

本年度の園内研究でご指導くださいました、文京女子大学・人間学部助教授 アレン玉井光江先生ならびに文京女子短期大学講師 上野めぐみ先生に感謝しお礼申し上げます。

(橋本 容子)